



「いじめ」に思う

—もんもんとする目々の中で 3/3—

吉成 タダシ (ストーリーライター)



卒業式で、同窓会で気づいた マユの思い

半年後に迎えた感動の卒業式。式のと、どこからともなく「長縄をしよう」という声が湧きあがってききました。式もお別れセレモニーも終わったあとの校庭で、借りてきた長縄を子どもたちが回し始めました。さて、マユは跳ぶのか?…跳びません。やはり、「こわい」と跳ばないのです。「マユ、跳ぼう!」との声かけは起こるのですが、あの時のような強引さはありませんでした。そしてやはり、マユは私の横に佇んで、長縄を跳ぶ仲間たちを見つめていたのです。しかし、体育祭と違っていたのは涙がなかったことでした。マユは跳ばないのですが、その事は分かっていたうえで、互いが互いを許容して、跳び、見つめていたように思えました。晴れやかな、卒業式の後の長縄でした。

三年後、子どもたちは、高校卒業の時を迎えました。この町を遠く離れて、まさに散り散りバラバラになる瞬間です。「同窓会をしよう」との声が上がり、自分たちで企画のすべてを取り切り始めていきました。でも、締めくくりとしてあったのは、やはり長縄でした。マユは跳ぶのか?…跳びません。でも、感情的な「こわい」ではありませんでした。少しはにかなだ、「こわいからいい」でした。この時も、マユは私の横に佇み、みんなが跳ぶのを楽しそうに眺めていました。みんなも、静かに見守られながら、まるで安心

したかのように、楽しそうに跳びました。私気づいたというか、感じたのは、この時でした。「…もしかすると、わざと跳ばないのかも?」マユは、どちらかといえば、特別な支援が必要な子どもです。だからこの町を離れて暮らすことは、まず考えられません。跳んでしまえば、そこですべては終わってしまい、みんなは自分の元から確実に離れていってしまう。もしかすると、忘れられてしまうかもしれない。でも跳ばなければ、いつまでも自分の元でいてくれる。自分の存在が忘れ去られることはなく、いつまでもみんなの輪の中にいられる。理屈ではなく感覚として、そんな思いを持つていたのではないかと思つたのです。もしそうだとすれば、マユを除いた私たちみんなは、マユの術中にはまっていたという事になります。言い方を変えれば、マユは私たち三Eを繋ぎとめる「鍵」になっていたという事です。これは大きな事です。真意は分かりません。でも私は、私の中で、「そういうことにしておこう」と思うことにしたのでした。

さらに二年後、二〇歳の成人式の祝い。あの時から感じていた私の予想はいつたいどうなのか。案の定、三Eは集まり、長縄をすることにになりました。長い時間会ってない時を超えて、マユもやってきました。他の集まれる者も、みんなやってきました。この時もマユは跳ぼうとしませんでした。ただ、じつとみんなが跳ぶのを見守るだけでした。私たち

の中では、「集まって跳ぶ」ことが、もう当たり前になっていました。本当にマユの術中にはまっていたのかもしれません。

私がかかれた中学三年生の一年間でできたことなど、ほんのわずかなことに過ぎません。人権学習といつても、そんなに多くの時間を費やせたわけでもありません。でも、結局そのなかで子どもたちの胸に残り続けたのは、人を、友を、仲間を大切にすることだったのではないかと思います。

十年後の同窓会で起こったこと

そして中学校を卒業して十年。またも、「集まろう」の声ががりました。しかし、地元を離れて何年も経ち、行方の分からない者もいます。それでも、集まれる者だけ集まり、することといえば、やはり長縄でした。大人になったマユの姿もありました。私たちにとって、マユとともに長縄は、もう外せない存在になっていたのだと思います。いえ、マユも含め、私たちの存在そのものが長縄ではなかったかと思ひます。前回、長縄をしたのは五年も前の話です。みんないい加減、大人です。日常生活の中で運動をしていない者がほとんどです。もう跳べる自信など誰にもありませんでしたし、続けて数回なんてでいての外でした。それはマユに限ったことではありませんでした。そんな状況でマユは、「うん、跳ぶよ!」何と、驚いたことに、自分から「跳ぶ」と言い出したのです。

あれだけ頑なに拒み続けてきたマユがです。跳べるだけに成長したのか。緊張感よりも、遊び心で跳べる気楽さからか。それとも、「長縄という呪縛から、もうみんなを解放しなくちゃ」と悟つたのか。すべてはマユの中にしかありません。とにもかくにも、みんなが跳ぶことは決まったわけです。でも、本当に跳べるのか? マユも不安だし、みんなも不安。そんななかで、いよいよ「せーの! イチ! ニー! サン!…」これが何と不思議な力でも働いたのでしょうか。跳べるのです。跳べたのです。みんなも、マユも。人間の能力はどうなっているのかと疑わしくなるくらいに、跳べていくのです。ただただ笑顔で、感動を抑えながら、一方で感動を爆発させながら、跳び続けるのです。嬉しさと感動以外、何もありませんでした。あの体育祭以来、十年ぶりの試技でした。教師はよく、「粘り強く! 根気強く!」と言いますが、粘り強く、根気強いのは、本当は子どもたちの方でした。子どもたちから教えられた、十年目の跳躍でした。

あの日以来、集まることはなくなりました。でも、長縄と共に、マユの存在も、決して私たちの中から消えることはありません。マユは、それだけ大きな存在であり、長縄は私たちにあって、それだけ大きな出来事だったので。私たちが人権学習を通して学び得たこと。それは、人としての生き方そのものかもしれない。そう思うのです。